

## 「お母さん」と叫んで死んだ戦友

滋賀県 佐藤 保

昭和十六（一九四一）年十二月八日、日本の真珠湾攻撃により大東亜戦争の火蓋が切って落とされました。連日ラジオから流れる軍艦マーチの曲に次いで報道される輝かしい戦果は、大人にも少年達にもすばらしい感動を与えました。十八歳の私の胸にも「海軍強し」と焼き付きました。家の中でも街中でも、ひっきりなしに流れる勇壮な軍艦マーチの曲に、戦勝ムード一色でした。その気運に乗って私は、昭和十六年十二月二十五日、海軍志願兵に応募しました。

私は大正十三（一九二四）年二月二十二日、十人兄弟の六番目に生を享けました。当時私の家は長野県飯田市にあり、昭和十七年一月、兵隊検査を受けましたが、その結果を待ちながら家業の屋根瓦の製造販売の手伝いをしておりました。生め

よ殖やせよの時代で、お国のためになる子を殖やせ、という国策で、子沢山の家は賞を頂く時代ですから、十人の子供を持つ家庭は決して珍しくはありませんでした。

軍国主義時代に入って、昭和六年九月十八日には満州事変が勃発し、上海事変になり、昭和十二年七月七日、支那事変が勃発して戦火は中国本土に広がりました。働ける男子はお国のために次々と赤紙で召されている時に、遂に大東亜戦争となり、いよいよ国を挙げての大戦争になってしまいました。

私の家も長男は海軍航空隊に、次男は高射砲兵として、三男は陸軍山砲兵として、それぞれ軍務に服しておりました。両親にとりましても働き手三人を軍隊に送り、しかも人手不足と共に生死を保証されないだけに、どんな辛い思いの日々であったでしょう。

その上、私までが母親の願いも聞かずに、勝手に海軍を志願しましたので、八月の初め「九月一アツツ島への上陸、七月には海軍機が豪州まで空爆するという快挙に胸を躍らせました。そして横須賀第二海兵団に入団する者は五人で、多くの方々に見送られて「万歳！ 万歳」で出発しました。

海軍の訓練は厳しいぞと、話には聞いていましたが、入団して三カ月間の教育訓練中は、海軍魂を叩き込んでやると、古年兵達が棒で尻を殴るなどの厳しい訓練に、時には涙を流すこともありました。その三カ月が終了しますと「館山砲術学校に入学を命ず」により館山砲術学校で教育訓練を受けました。そしてそこを卒業後、陸戦隊訓練を受けるために数カ所の訓練所を回り訓練を受けました。三重県潮浜燃料廠にも勤務したこともありました。

昭和十七年に入って、南方での戦争はいよいよ激化して、六月にはミッドウェー海戦やキスカ島、

移動を命ぜられ、千人ぐらゐの大移動となりました。

七月初旬、私達の大部隊は広島県の呉軍港に移動しました。この頃は、南方への輸送はアメリカ軍の空爆や潜水艦の襲撃を受ける恐れがあるため輸送船ではなく航空母艦「翔鶴」に乗船させられ、両側には駆逐艦二隻が護衛し、南方へ向いて南下しました。

マーシャル群島のトラック島で空母「翔鶴」を降り、巡洋艦「那河」に乗り換えて目的地ミレー島に向け出港しました。米軍の空爆や潜水艦を避けつつ二昼夜航行して、七月末にミレー島に到着しました。ミレー島はマーシャル群島の中央部に位置した珊瑚礁の島で、周囲八キロぐらゐ、海拔三メートルぐらゐの島で、三角形をしていて周囲に二十余の珊瑚礁の小島が在り、干潮時には歩いて渡れる位の浅い海で繋がっております。

巡洋艦から見た島の姿は、白砂の上に椰子の樹が林立して、青い海に浮かんでいる姿は美しく極

れ、ミレー島にもB24九機が飛来し、初めて空襲を受けました。

初めての経験で慌てて高角砲を発射しますが、弾丸は八千メートルぐらゐの高さで破裂して、高々度からくる敵機には届きません。高射機関砲も何の役にも立たず残念がりました。「さあ、敵機がまたくるぞ」と島内は緊張しました。ボーゲンビル島沖航空戦は第二次、第三次と続き、日米両軍共に貴重な航空機が次々と失われました。

十一月二十五日にはマキン島、タラワ島の両島の守備隊が玉砕し、ミレー島への攻撃が激しくなり、連日米空軍機の空襲を受けました。三十機、四十機と高空と低空から飛来して、それぞれ爆弾を投下して立ち去ります。

十二月十四日、佐世保海兵団で訓練された若い海兵隊が百人ぐらゐ援兵として来島しました。この厳しい戦いの最中によくぞ無事に上陸してくれたと喜びました。十二月十七日、B24八機来襲、投下する爆弾の音が空気を振るわせて、自分の頭

楽島のように映りました。「うわ！ 素晴らしい島だ」と歓声を挙げたくらいでした。その島の中に白い兵舎が建ち並び、まるでホテルのように感じました。ミレー島は、小さい島ながら重要な軍事基地と教えられました。

A B Cの三本の滑走路もあり、攻撃機が五十機ぐらゐ配備されておりました。当時の兵員は陸軍約二千人、海軍約二千人(我が海軍部隊を含めて)、施設部隊(軍属)約二千人で、合計約六千人の兵力が配備され、志賀海軍中佐を司令官として、この島を守備し米軍基地に攻撃を加えていたとのことでした。

到着してから三カ月余りは、二百人ぐらゐの現地人と一緒に、椰子の木に登り椰子の実を採って、椰子の汁を飲む、椰子の汁を煮詰めて飴を作る、海に一緒に行つては豊富な魚を獲るなど、のんびりと楽しい日々でした。

十一月二日にはボーゲンビル島沖海戦をはじめ五日には第一次ボーゲンビル島沖航空戦が展開さ

に落ちて来るような物凄さです。爆弾は滑走路に落ち大きな穴が開きました。その夜、その爆撃の跡は修復されましたが、大変なことになるぞと思いました。

十二月十九日、米軍戦爆連合の二十機が来襲、我が軍の北砲台と南砲台からも一斉に高角砲が発射されました。米空軍機は爆弾を投下すると飛び去つて行く。この日も本部地区兵舎が一棟倒壊し、滑走路に待機中の零戦三機が破壊され炎上しました。

十二月二十日、米軍戦爆連合の三十機が波状攻撃で南砲台と北砲台に集中攻撃をしました。目的は両砲台の破壊でしょうが、守備する海兵隊員も数人が戦死したとのことでした。十二月二十一日、米軍戦爆連合の二十機が、二回にわたり波状攻撃に来襲、このため航空隊の宿舎が破壊されました。

十二月二十三日、米軍戦爆連合機が来襲、本部と望楼地区が被弾して破壊されました。加えて武器と弾薬に食糧を積載して入港した「南海丸」が

発見され、戦車四両とわずかの弾薬を荷揚げしただけで、沈没してしまいました。兵士も十四人が戦死、重傷者七人が出たとのことでした。「南海丸」がやられずに全食糧と弾薬が陸揚げされていたら、対空戦、対戦艦攻撃にも応戦が出来たであろうし、また飢餓に苦しむことはなかったろうと返す返すも残念でした。

毎日二十機、三十機という空爆でゆっくり休むことも出来ず、応戦することに精一杯でした。立派な兵舎も、青々と繁っていた椰子の木も、連日の空爆で吹き飛ばされ、見る影もなくなりました。年末年始にかけての米空軍機の空爆は物凄く十二月二十四日に三十機、二十五日に三十六機、二十七日にはB 24 八機、二十八日もB 24 二機とB 25 十機、二十九日にはB 24 六機とB 25 十三機、そして三十日にB 25 八機と戦爆連合機十四機と休む日もなく来襲しました。三十一日の戦爆連合機四十機の空爆では最も被害が大きかったようです。南砲台も北砲台も破壊されてしまって、もう

らに二〇ミリ弾が両足の間で炸裂し、左足は親指のもとで骨折、右足は外クルブシに破片を受けました。

それでもその時は、戦友と一緒に夢中で機関銃を敵機に向けて射ちまくっていたので痛みを感じませんでした。敵機が去った後、戦友が「これは大変な傷だ」と大声で叫び、流れる血を押さえながら私を防空壕の中へ運んでくれました。医薬品が全然ありませんので、消毒用に海水を沸騰させて傷口を洗い、ガーゼを傷の穴に詰め込み、上から押さえてくれましたが、傷が痛み始めて辛抱出来ないぐらい痛みました。

防空壕の中は温度と湿度が高いので、傷口が化膿し蠅が傷口に卵を生み、それがウジとなつてはい回ります。連日の空襲で爆音と対空砲の音、傷はきりきり痛むのでどうしようもない辛い毎日でした。空爆で食糧倉庫は破壊するし、「南海丸」の沈没によって食糧補給が遮断されてしまいました。

一月三十日、米空軍機P 39 十二機が三回にわた

対抗する手段がありません。

爆弾にも種々あって破壊弾（爆発して対象物を破壊する普通の爆弾）、殺生弾（爆撃の先に尺八のようなものが付いていて、地に着くと共に横に飛び爆発して殺傷する爆弾）、時限爆弾（装置された時間に爆発する爆弾）、油脂爆弾（ドラム缶のような容器に油が入っていて着弾と同時に油に火が付いて燃え広がる爆弾）などの爆弾を次々と投下します。

特に油脂爆弾が投下されると、防空壕の中まで点火された油脂が流れ込み、半袖、半パンツの私達は火傷を受け、その手当のために大切な一装軍服を破いて応急手当等をした。こうしてアメリカ軍は種々の爆弾を使用して我々を苦しめました。

ある時、艦載機が低空で飛来し、機銃掃射と爆弾を投下して過ぎ去ったので、私は二回目に来襲した艦載機に向かって応戦のため弾を銃に込めようとするのめりになった時、斜め上からの機銃掃射で一三ミリ弾が私の背中を縫うように貫通し、さ

り滑走路に爆弾を投下し、飛行場は使用不能になってしまいました。二月四日から主食が二割減食となりました。二月五日、クエゼリン島が玉砕しました。二月二十五日、主食が四割減食となりました。四割減食とはお粥しか出来ません。

二月十一日、呂号第四四潜水艦（艦長橋本少佐）が三月二日にトラック島を出港し、食糧十一トン積んでミレー島に到着、早速荷揚げが開始されました。有り難い食糧でした。制空制海権のない海をよくぞ来てくれましたと一同喜び合いました。食糧十一トンは、二十日間島内の全員が生き延びられる量でした。

三月十八日、日の出と共に敵機来襲、第一波、第二波と我が者顔に飛び回り、陣地を襲つて来ますが対空砲が破壊されどうしようありません。十時半頃から艦砲射撃が始まりました。戦艦五隻、巡洋艦三隻、駆逐艦七隻の機動艦隊と聞きました。空から爆弾、海から艦砲射撃、砲弾の唸りの音、爆弾の爆発の地響、それらがいつ防空壕に飛び込

んでくるかわからない。私は防空壕の中で痛い傷口を手で押さえながら、逃げ出すことも考えておかねばならず、「畜生！ 畜生」と皆が残念がりました。

三月二十日、主食は五割減となり、重湯となりました。口から腹に入れても大の男には何の足しにもなりません。腹がペコペコでは足に力が入らず、ふらふらながら空襲の後始末をするのに一生懸命です。食べられる物は何でも食べなきゃ体が続かないので、四月十六日、沈没した「南海丸」から役に立つかどうかわからないが、物資を引き上げられるようになりました。

また一方では、農園作りを始めるため、食料品運搬船「虎丸」が持ってきてくれた種子を蒔き、少しでも食糧事情を緩和しようと思いました。南瓜は順調に育ちましたが、連日の空爆で実が熟するには至りませんでした。

四月二十九日の天長節の日は、少量でしたが米食と漁労班の活躍により、鰯を一人当り二匹ずつ食抜きから中食抜き、ついに夕食だけの一食となりました。最悪です。

九月からは二分食となり、椰子のコブラを削っては汁を作り、それに少しの米を入れてはありましたが、つぎ方次第では米一粒も入らないコブラ汁だけになる者もありました。腹はペコペコで立上りも出来ない者も続出しました。戦争どころではなくなりました。島で捕れる動物のねずみ、カラス、海の魚、貝類、椰子カニ、伊勢えび、たこ、椰子の実、パンの実、パイヤ、豆の木、朝顔の葉、食べられる物はなんでも食べて餓えをしのぎましたが、九月頃から餓死する者が続出しました。

本部の調査では、毎月三百人ぐらいの死者が出て、戦闘による戦死者はその一割ぐらいといわれ、死者のほとんどが栄養失調による餓死であったと聞いております。体力は日を追うごとに衰弱し、その上アメーバ赤痢とパラチフス、 Dengue 熱が発生し、薬品がないので悲惨な光景でした。

この頃、苦しみを短歌に残した中に、

割り当てられ、嬉しいお祝いの食事でした。久しぶりの御馳走で「うまかった」と喜びました。

五月中旬、ミレー島にアメーバ赤痢が多発し、薬も無い上に体が衰弱しきっているため死亡者が続出しました。ネズミ、トカゲ、草の根、食べられる物を探して食べました。

ミレー本島は連日の爆撃で椰子の木も倒れ、種子を蒔いても生育出来ず、このため二十有余ある島々に兵員を分散することが計画され、兵員が割り当てられました。干潮の時は陸続きになりますので助かります。「南海丸」からの引き揚げられた米は悪臭を放ち、食糧にならないので海水で何回も洗い、日光で乾燥し、それを粉にしてダンゴ汁として分配されました。

六月十二日、伊号第一八四潜水艦が、わずかな食糧と種子類をゴム袋に入れて流してくれて助かりました。ゴム袋には、南瓜、西瓜、きゅうり類の種子が入っていたので、自作農園作りに大いに役に立ちました。食事もお粥から重湯になり、朝

ひもじかと 問うも愚かぞ 此の頃は

死にたる戦友を 幸に思ほゆ

何故に 吾を生みたりと 父母までも

恨む程 心萎べり

爆撃機 遠く去りたり ものいわぬ

体いくつぞ 硝煙の切間に

南海の 孤島の砂を紅に 染め散りゆく姿

何故につたへむ

餓死する者、傷を負い再起不能と判断して自殺して行く者、休みなく米空軍機の爆弾投下、まるで生き地獄の様相の中で、出ない声をふりしぼって「お母さん」とただ一声叫んで、息絶えてこの世を去って行く戦友達、この姿を何と伝えよう、涙流して別れねばならない辛さ、こんなに苦しむなら先に逝った者が幸だと思ったり、なぜに両親は生んでくれたのかこんな苦しい思いをするのにと、両親を恨むこともありました。

背中の負傷のため、二人の戦友達が私の手足を押さえて、傷口のウジを取り除きながら治療をし

てくれました。頬はこけて目ばかりキョロキョロして這い回る姿、戦争どころではありませんでした。

七月七日、米軍メジロ島司令官より、降伏勧告書が飛行機より投下されましたが、志賀司令は拒否されたと聞きました。降伏を勧めるビラの内容は次のような文書で空から何回か投下されました。

○ 君らが餓死したら日本が勝つと思いますか  
○ ネズミ、トカゲを食べていつまで戦えますか

○ 君らの現在の苦しみを内地の人は知っているでしょうか

○ 餓死を戦死と偽り君達は満足して死ねますか

○ 君らの親兄弟、妻子は餓死と聞いてどう思うでしょうか

○ 君たち親兄弟、妻子は内地を出る時、口では死んで帰れと云いますが、心から君らが

夕食から一人当り五合のお粥が配分されました。

空襲がなくなり静かな日々が続きました。固い御飯を急いで食べると胃に異常を来すために、お粥にされたと聞きました。本日から非常食と、米軍補給食と合わせて一人当り一合の主食が配給されることになりました。やっと安心して食べられる喜びでいっぱいでした。

昭和十九年十一月九日から十カ月余、正月を除いて米らしい米を口に入れていないだけに一同大喜びでした。米が食べられると大はしゃぎでした。

九月八日、ミレー環礁において散華された三千余柱の英霊に対し、終戦の報告と慰霊のため、A滑走路内の海寄りで全軍による合同慰霊祭が厳粛に執り行われました。急造の白木の祭壇には久しく目にしなかつた銀飯が二盛供えられ、南瓜と椰子の実が積まれ、二年余りの爆撃で花が有りませんので、南瓜の雄花と雌花が左右に飾られ、ローソクの代わりに椰子の油の灯油が灯されて読経のない慰霊祭でした。

死ぬのを願っているでしょうか

○ 神風はなぜ吹かないのでしょうか  
以上のような文句の降伏ビラでした。

八月十六日、天皇陛下の玉音放送により「本日以降連合軍に対する戦闘行為を停止せよ」と、電文を受領されたそうですが、私達に知らされたのは八月十七日のことでした。「戦争は負けたのか」「戦争は終わったのか」と、無念の涙は出ましたが、無念さの中にも今の現状では「よかった」のではないかとも思いました。

八月十八日、志賀司令より、「本日からすべての軍事行動は停止する」との命令が発せられました。今度どうなるのかみんな不安一杯でした。

八月二十五日、武装解除、米軍の立会いの下、残り少ない武器弾薬を棧橋の所に積み重ねました。命を守ってくれたこの銃をと、無念の涙を流しながら海中に投げ込みました。

八月二十八日、米軍は食糧が欠乏していることを知り、主食と副食を補給してくれたとのこと、

「お母さん」と叫びながら死で逝った戦友達の顔が次々と目の前に浮かび、涙を止めることが出来ませんでした。

九月十三日、復員船「氷川丸」が二十八日入港するとの電信が本部に入ったと聞き、一同歓声を挙げましたが、後刻乗船人数は半分と知らされ、一同はしみりとなりました。電文の内容は、「病人を優先し、生存者の半分は乗船出来るが、残員は別船入港まで待機せよ」とあり、志賀司令は立腹をされて、直ちに全員が乗船出来るように要請するよう、副長に命ぜられたとのことでした。

九月十五日、「氷川丸」は「ミレー島に向け本日舞鶴港を出港した」との電信があつたと聞かされました。九月二十日、ミレー島は付近の島からの引揚者の受入れが準備され、「帰れる」との朗報に痩せかけた顔にも笑顔が返って来ました。一方、本日から量は少ないが普通食となりました。軍医より急いで食べないようにとの注意がありました。喜びの嬉しさの余り急いで口に入れて喉に詰まり急

死する者もおりました。残念なことでした。

九月二十三日、陸海軍の下士官、兵はA滑走路に集合を命ぜられました。完全武装した米兵が、島民二人と共に整列している私達の顔を見ながら通りました。聞きますと原住民虐待の犯人探しとのことでした。

九月二十五日、志賀司令以下四人がMPに付き添われ飛行艇に乗り込まれたとの情報も入りしました。理由は捕虜殺害犯人調査のためと聞きました。日本軍に射ち落された航空機の搭乗員のことでした。

九月二十六日、各島からの生存者全員が集合完了、昨日に引き続き戦犯容疑者として、陸軍四人、海軍四人計八人の方がメジュロ島に連行されたとのことでした。「氷川丸」入港直前の出来事で、誠に気の毒なことでした。九月二十七日、「氷川丸」から全員乗船準備せよとの連絡があり、一同ホットしました。「全員帰れるぞ」と皆の表情が明るくなりました。

千五百九十九人、合計二千五百九十人が乗船しました。

昭和十八年十二月十四日、最後の増援隊を含め、陸軍二千五百十九人、海軍三千二百三十七人、合計五千七百五十六人、差引き戦死者は三千百五十四人になります、以上の数字は司令部の発表数字です。

夕食は「氷川丸」の心尽くしで、尾頭付きの煮魚と味噌汁、「ぶどう」に「なし」が付いてあり、何年振りかの日本食でした。よだれの出るような献立でした。「勿体無い、有り難い」と真心のこもった献立に合掌して箸を取りました。その味たるや涙の出るようなおいしさでした。

栄養失調で餓死した戦友達にも、一口でも食べさせたかっと思ふ途端、涙が流れ、詫びながらの食事でした。夕食後甲板上では離島分散で離ればなれになっていた戦友同志が、生きていてよかったですと語り合う姿が見受けられました。

船上から見るミレー島、三年前巡洋艦「那珂」

九月二十八日、朝食後に各隊担当地域の清掃をしました。逃がっている島民が帰島してもすぐ使用出来るように備品も整然と並べました。「氷川丸」は午前五時頃、高岩水道から入港、白い船体に赤十字のマークも鮮やかに「南海丸」の沈没した付近に投錨しました。その姿を見た時、嬉れし涙が流れました。

やっと日本に帰れるぞとの嬉しさがいっぱいでした。そして一時間半位したら全員乗船出来るとの報に、皆「万歳」を叫びました。「日本に帰れる」この喜びに、傷の痛みも忘れてしまいました。戦友達も痩せ細った体を抱き合いながら嬉し涙を流し合いました。「よかった、よかった、生きていてよかった」と。

皆が乗船開始と共に、棧橋からは米軍の内海艇で輸送してくれました。十二時二十分、遺骨を抱いた戦友が先ず乗船、次いで私達傷病者と続き、十五時四十分頃全員乗船完了。この時の生存者、陸軍九百九十一人、海軍(施設隊六百一人を含む)

から見た時の極楽鳥の様相は全くなく、パンの木、椰子の木が、火砲や爆弾で中途より折れて、まるで卒塔婆のようにして立っており、激戦の生々しさを物語っていました。ホテルのようだった白い兵舎は影すらありません。荒廃し切った地獄島のように見えました。滑走路の向こうに海が続き、太陽がまさに水平線のかなたに沈まんとするミレー島で見た最後の落日でした。

九月二十九日、朝食後、午前八時「氷川丸」は出港しました。私は急いで甲板に駆け上がりました。甲板には多くの人達が、座して合掌しておりました。このミレー島に悲惨な苦しみと恨みを残してこの世を去られた戦友たち、三千有余柱の安らかなご冥福をお祈りしました。「成仏して下さいよ」と心の中で叫びました。二度とこのような悲惨な戦争を繰り返してはなりませんと、心から誓ったものでした。

爆撃がなくなつたからでしょう、浜千鳥が船の周りを群れ飛び、私達を見送ってくれました。私

達も「さようならミレー島」と手を振りました。その夜船内で、志賀司令が全責任を負ってメジュロ島で自決されたことを聞き、惜しい人を失くしたと残念に思いました。高潔で崇高な人格者で、部下を大切にされた方と聞いておりましたので、志賀司令のご冥福をお祈りしました。

乗組員の長野県出身の方から、広島と長崎に原爆が投下されていたことを聞いて、終戦も止むを得ないと思えました。そして国内の食糧事情等も説明してくれました。船の中では、ミレー島の悲惨な戦争状況や、アメリカ軍の物凄い物量、優秀な兵器、爆撃の激しさ、食べ物不足で苦しんだ毎日、食べられる物は何でも探して食べたあの悲惨な姿、痩せ細り、空ろな目で「お母さん」と呼んで息絶えた多くの戦友のこと等、話は尽きませんでした。

戦争に負けた私達は、どの面して帰って来たかと責められるだろうな、云われるだろうなあ、みんな覚悟して帰ろう。帰ったら住む家は残っていない。

敗戦の無念さと恥じらいに、皆うつむいて嗚咽が止まりませんでした。

出迎えの婦人会員の中には、我が夫や我が子を戦死させられた方々もおいでであったろうにと思いい、一層感謝の気持ちで胸が詰まる思いでした。

私達は野比の海軍病院に入院させられました。

他の戦友の皆さんは翌八日上陸し、横須賀市の海軍工作学校の宿舎に入り、それぞれ故郷へ帰つたと聞きました。私は海軍病院で初めて治療らしい治療を受けました。治療を受けながらミレー島での出来事、負傷したときの痛みと苦しさが思い出され、また涙がこみ上げて来ました。このような治療を受けていれば死なずに済んだ人達も数多くいたのであろうと、医薬品皆無のミレー島に思いを馳せました。

一週間ぐらいの治療の結果、温泉治療が効果ありと判断されたのでしよう。奥湯河原の「山水楼」という温泉治療所(海軍病院の一部)に移送され、この地で療養しました。しかし家のことが心配に

るかなあ、働く場所はあるかなあと、音信不通のままであつた祖国に思いを馳せ、喜びと不安が飛び交いました。

十月七日、あの美しい富士山の姿を見た時の嬉しさと、間違いなく祖国日本に帰って来たとの喜びをかみしめつつ、午後二時、浦賀港に無事入港しました。さすがに初秋、吹く風は冷たく感じました。船内で支給された長袖、長ズボンの服を着て急ぎ検疫をすませました。私達負傷者や病人は直ちに上陸開始、懐かしい日本本土に上陸した嬉しさがこみ上げて来ます。

よろよろしながらも祖国の土を一步一步踏みしめての上陸に、嬉し涙が頬を濡らします。「帰つたぞ、日本に帰つたぞ」との嬉しさがいっぱいです。上陸して驚きました。道路の両側には「国防婦人会」のたすきを掛けた婦人会の皆様が三重にも三重にも並んで、涙を流しながら「ご苦労様でした、お帰りなさい」と出迎えて下さいました。しかし私たちは、温かいその出迎えの言葉を聞きながらも、

なり、兄達三人の復員や、父の経営する瓦製造のことなどを思うと、ゆっくり寝ている気にもなれず、無理にお願いして退院させて頂きました。

十二月の歳の暮、雪いっぱい故郷の家に帰りました。階級は海軍二等兵曹でした。元気な私の姿を見た両親をはじめ家族一同、涙を流して喜んで迎えてくれました。長男が戦死したことと三男がまだ帰っていないことを聞かされ、私の帰宅は一層嬉しかったのでしよう。私も仏壇の前で、飢餓の島から無事帰れたのもご先祖のお陰でしたと、心から御礼を申しました。

冥想しますと「お母さん」と叫んで息絶えて、この世を去つた戦友達を思い起こし、二度とあの悲惨な戦争があつてはならないと誓いました。一年遅れて三男も無事帰りました。

復員後は東京の築地魚河岸で昭和五十四年夏まで働き、現在も元気で滋賀県志賀町でがんばっております。

戦争の話をする、戦友のことを思い出し辛く

なりますが、戦争の悲惨さと残酷さを、今の若い人達に知ってもらおうと話をするのが、戦争を体験した者の務めだと思い、大津市にあります「戦争体験を語り合う会」に入会し、小学校等で体験を発表させて頂き、戦争体験者の責務の一端を果たしております。今後も頑張ります。

飢餓の島 ミレー島に眠る 我が戦友よ

守り下さい 平和日本を